下林バンジョウアケ遺跡

2016

石川県野々市市教育委員会

例　　言

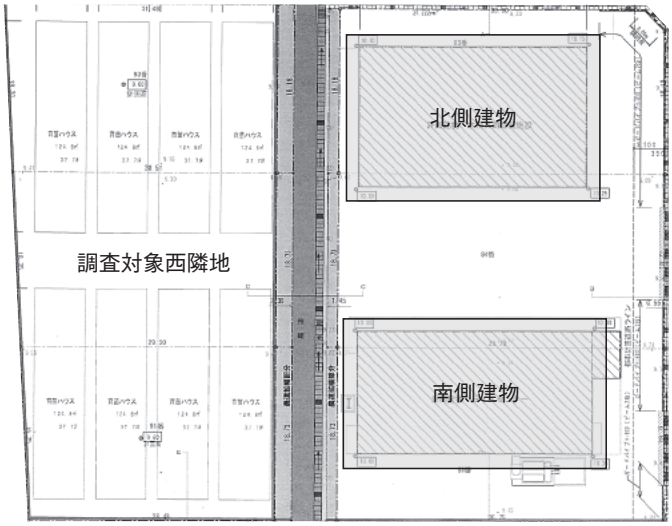
1　本書は、下林バンジョウアケ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　遺跡の所在地は、石川県野々市市下林二丁目地内である。
3　調査原因は、野々市農業協同組合によるライスセンター建設に伴うものである。
4　調査は、野々市農業協同組合からの依頼を受けて野々市市教育委員会が実施した。
5　調査にかかる費用は、野々市農業協同組合が負担した。
6　現地調査の年度・期間・面積・担当者は以下のとおりである。
　・現地調査期間　　平成 27 年 10 月 23 日～平成 27 年 12 月 3 日
　・現地調査面積　　952㎡
　・調査担当者　　西村　慈子（野々市市教育委員会文化課 主事）
　・報告書執筆・編集　　西村　慈子
　・出土品写真撮影・報告書執筆補助　菊地　由里子（野々市市教育委員会臨時職員）
7　本書についての凡例は以下のとおりである。
　(1) 方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。
　(2) 水平基準は海抜高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。
　(3) 出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真に対応する。
　(4) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。
　(5) 土層図・遺物観察表の色彩注記は、『新版標準土色帖』に拠った。
　(6) 遺構名称の略号は以下のとおりである。
　溝：SD　土坑：SK　小穴：P　竪穴住居：SI　掘立柱建物：SB　自然流路：SR
8　調査に関する記録と出土遺物は、野々市市教育委員会が一括して保管・管理している。

第 1 章 経緯と経過

下林バンジョウアケ遺跡発掘調査業務は、下林二丁目地内におけるライスセンター建設を調査原因とする。平成 27 年 5 月、野々市農業協同組合から野々市市教育委員会（以下、市教委と呼称する）に下林二丁目地内でのライスセンター建設の打診があった。建設予定地は田地として使用されており、埋蔵文化財の有無については不明であったことから、農業協同組合協力の下、稲刈り終了後の 9 月末日に試掘調査を行った。結果、土坑や溝などの遺構を確認したことから、さらなる遺構の分布範囲を把握するため試掘調査範囲を拡大したところ、建設予定地のほぼ全域に遺構が分布することが判明した。よって市教委は、埋蔵文化財包蔵地として保護措置を図り、平成 27 年 10 月 13 日付石川県教文第 1880 号において周知の埋蔵文化財包蔵地として下林バンジョウアケ遺跡が認められた。

ライスセンター建設については、建設箇所において（第 1 図）、発掘調査が必要となったことから、石川県教育委員会に対し、平成 27 年 10 月 15 日に埋蔵文化財包蔵地における土木工事取り扱い手続きを進達、同日付で通知がなされた。現地での発掘調査は、10 月 23 日より現地掘削作業を開始し、大型重機での掘削後、人力による掘削作業を行った。また、掘削作業と並行して遺構記録及び図化作業を行い、12 月 3 日に現地発掘調査作業を完了した。

出土遺物の整理作業は発掘調査と並行して行い、平成 27 年 11 月 10 日から出土遺物の洗浄等を開始し、遺物接合及び実測作業、遺物写真撮影、報告書作成を経て、平成 28 年 3 月 29 日に発掘調査報告書を刊行した。



第 1 図　調査区図

第２章 遺跡の位置と環境

第１節 遺跡の位置と環境

野々市市は石川県のほぼ中央、石川平野の要地に位置する。市の大きさは、南北約 6.7㎞、東西約 4.5㎞で、県内で最も面積が小さい自治体である。市の位置は、白山を源とする県下第一級河川である手取川によって形成された手取川扇状地の北東扇央部から扇端部にあり、市の標高は、最も高い地点で標高 50m、最も低い地点で標高 10m と、南から北へ向かって緩やかな斜面となる地勢を有している（第２図）。

今回の発掘調査地である下林バンジョウアケ遺跡は、市域のほぼ中央に位置し、扇状地扇央部にあたる。標高は約 30.5 ～ 31m で、扇状地を流れた旧河川によって形成された小さな河川地形の微高地上に存在する。

第２図 野々市市位置図

第２節　歴史的環境（第３図・第１表）

縄文時代　手取川扇状地扇端部にあたる野々市市北部は、扇状地の地下を流れる豊かな伏流水に恵まれた地域であり、多くの遺跡が集中する。とくに、縄文時代後晩期には多くの集落が形成され、国指定史跡御経塚遺跡（野々市市）ほか、国指定史跡チカモリ遺跡や中屋サワ遺跡（金沢市）といった著名な遺跡を筆頭に数多くの縄文集落遺跡が分布している。対して、扇央部にあたる野々市市南部では、縄文遺跡はわずかに散見するのみである。しかし、当遺跡から南東 1.0㎞の位置にある粟田遺跡（野々市市）では縄文晩期の打製石斧製作跡が確認されており、手取川扇状地における、扇端部と扇央部の生活環境や生産活動の違いを考える上で重要な資料となっている。

弥生時代・古墳時代　扇端部・扇央部ともに弥生前・中期には集落遺跡が少なく、後期に多い。また、後期に増加するのは縄文時代と同じく水の豊かな扇端部に集中している。扇央部における開発は古墳時代後末期に始まり、当遺跡から南東 1.5㎞の地点には上林古墳が築造される。

古代　扇端部には国指定史跡東大寺領横江荘遺跡 荘家跡 上荒屋遺跡（白山市・金沢市）といった初期荘園が、扇央部には当遺跡から南西 1.0㎞の位置に国指定史跡末松廃寺跡（野々市市）がある。末松廃寺は７世紀後半に建立された県内最古の古代寺院であり、法起寺式の伽藍配置を有している。この時期の扇央部の集落遺跡では、大規模建物跡が急増する傾向がみられることから、一帯において急速な開発が進んだ時期であると考えられる。

中世以降　11 世紀後半～ 12 世紀頃、扇状地開発に伴って林氏や富樫氏などの在地領主武士団が興った。林氏は、当遺跡が在する林郷（上林・中林・下林）を支配したともいわれるが、13 世紀前半には没落した。それに代わり台頭した富樫氏は、建武２年（1335）に守護職に任ぜられ、富樫館（野々市市）を設けて守護所とし、大規模な堀を築いて加賀国の中心地として繁栄した。市内北部では、14 世紀頃の集落遺跡を複数確認しており、散居村的様相を呈していたことがわかる。15 世紀になると散村から集村へと集落の形態が変化する。近世に入ると金沢城下町の近郊地として各地に農村が点在するようになった。

第３図 調査地周囲の遺跡（S=1/25,000）

第１表 周囲の主な遺跡

No	遺　跡　名	時　代
1	三納トヘイダゴシ遺跡	中世
2	藤平田ナカシンギジ遺跡	中世
3	三納ニシヨサ遺跡	中世
4	粟田遺跡	縄文・古代・中世・近世
5	清金アガトウ遺跡	縄文・古代・中世
6	末松 A 遺跡	縄文・古代・中世
7	末松ダイカン遺跡	古代
8	末松廃寺跡	弥生・古代・中世・近世
9	下新庄アラチ遺跡	古代
10	下新庄タナカダ遺跡	古代
11	上林新庄遺跡	縄文・古墳・古代
12	上林古墳	古墳
13	上林テラダ遺跡	古代
14	上林遺跡	弥生・古墳

第 3 章 調査区と基本層序

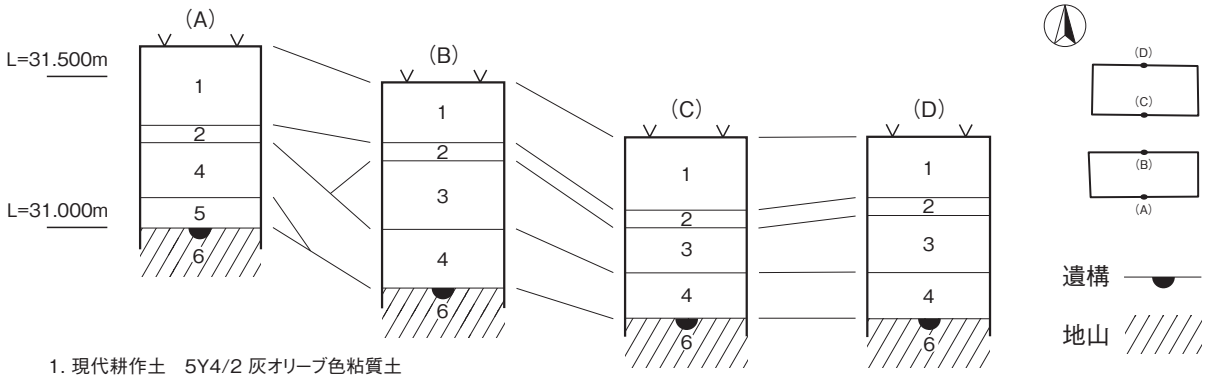
第 1 節 各調査区について

今回の調査では、遺構が破壊される範囲のみを調査対象地とし、破壊されない範囲は調査対象から外した。そのため、対象地は南北 2 棟の建物範囲のみとなり、またそれぞれは別棟であることから、北側建物範囲を N 調査区（486㎡）、南側建物部範囲を S 調査区（466㎡）と名称を与え調査した。調査成果についてもそれぞれ分けて記す。

第 2 節 基本層序

S 調査区からは A･B 地点、N 調査区からは C･D 地点の土層断面を抽出し、土層柱状模式図を作成した（第 4 図）。

第 1・2 層は現代水田耕作土層および床土、第 3 層は旧耕作土と整地土の混在層である。第 4 層は古代以降の遺物包含層である。第 4 層は単一層としたが、土質はシルト・シルト質粘土・粘質土が混在しており、これらを明確に分層することは困難であった。このことは、第 4 層が堆積と攪拌を複数回繰り返したことを示している。なお、この包含層の一部には微砂によるラミナもみられた。第 6 層は地山層で、この直上で遺構面を検出した。



1. 現代耕作土　5Y4/2 灰オリーブ色粘質土
2. 現 代 床 土　7.5Y6/1 灰色粘質土（Fe沈着）
3. 包　含　層　10YR4/3･5/3･5/4 にぶい黄褐色砂質土･粘質土
4. 包　含　層　5Y2/1 黒色粘質土
5. 4層と6層の混土
6. 地山　10YR5/6 黄褐色～6/6 明黄褐色（北は砂質土、南は粘質土）

第 4 図　土層柱状模式図（標高スケール：1/20）

第 4 章 調査の成果

第 1 節 N 調査区

SK21（遺構：第 5 図）

N 調査区の中央東側で検出した土坑である。南北 130㎝、東西 120㎝、深さ 60㎝、掘方は丸みを帯びた擂鉢状である。遺物はない。埋土の堆積状況から掘削と埋没の時間差が推測でき、一定期間使用されたと考えられる。

SK132（遺構：第 6 図　遺物：第 13 図―19）

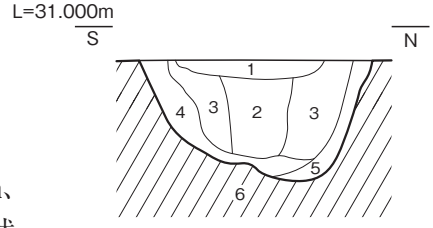
N 調査区の中央西側で検出した直径 25㎝、深さ 30㎝の土坑である。遺物は、意図的に半裁された 9 世紀中葉の内黒土器 1 点が出土した。土器は平底で、内面のミガキは密である。外面には赤彩塗布の痕跡が残る。

SK173（遺物：第 13 図―18）

N 調査区の北壁中央で検出した不整形土坑である。深さは 5㎝と浅いものの、末松廃寺の平瓦片 1 点が出土した。他の遺物は全て土師器片であるが、中世に遡るものはない。

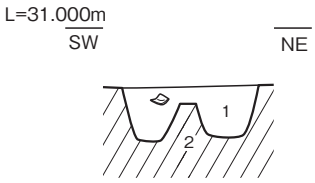
SB1（遺構：第 8 図）

N 調査区の北壁中央で検出した掘立柱建物である。南北 2 間、東西 2 間の建物であり、南北方向を主軸とすると、N6°―E とやや東に振る。建物規模は、南北柱間が 1.6 ～ 1.7m、東西柱間が 1.8 ～ 1.9m である。柱穴の直径は 20 ～ 30㎝、深さは 20㎝、面積は約 12.2㎡である。遺物はないが、SB1 東側柱穴が SK173 に切られることや周辺の遺構の状況から、9 世紀を下らない時期の建物と考えられる。



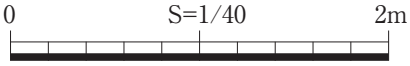
1. 10YR3/4 暗褐色粘質土にφ1cmの 2.5Y7/4 浅黄色シルトブロック混じる
2. 10YR3/1 黒褐色粘質土に砂礫混じる
3. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
4. 3層に2.5Y5/4 黄褐色粘土ブロック混じる
5. 10YR4/1 褐灰色粘質土
6. 2.5Y5/4 黄褐色粘質土（Fe沈着）（地山）

第 5 図　SK21 土層断面図

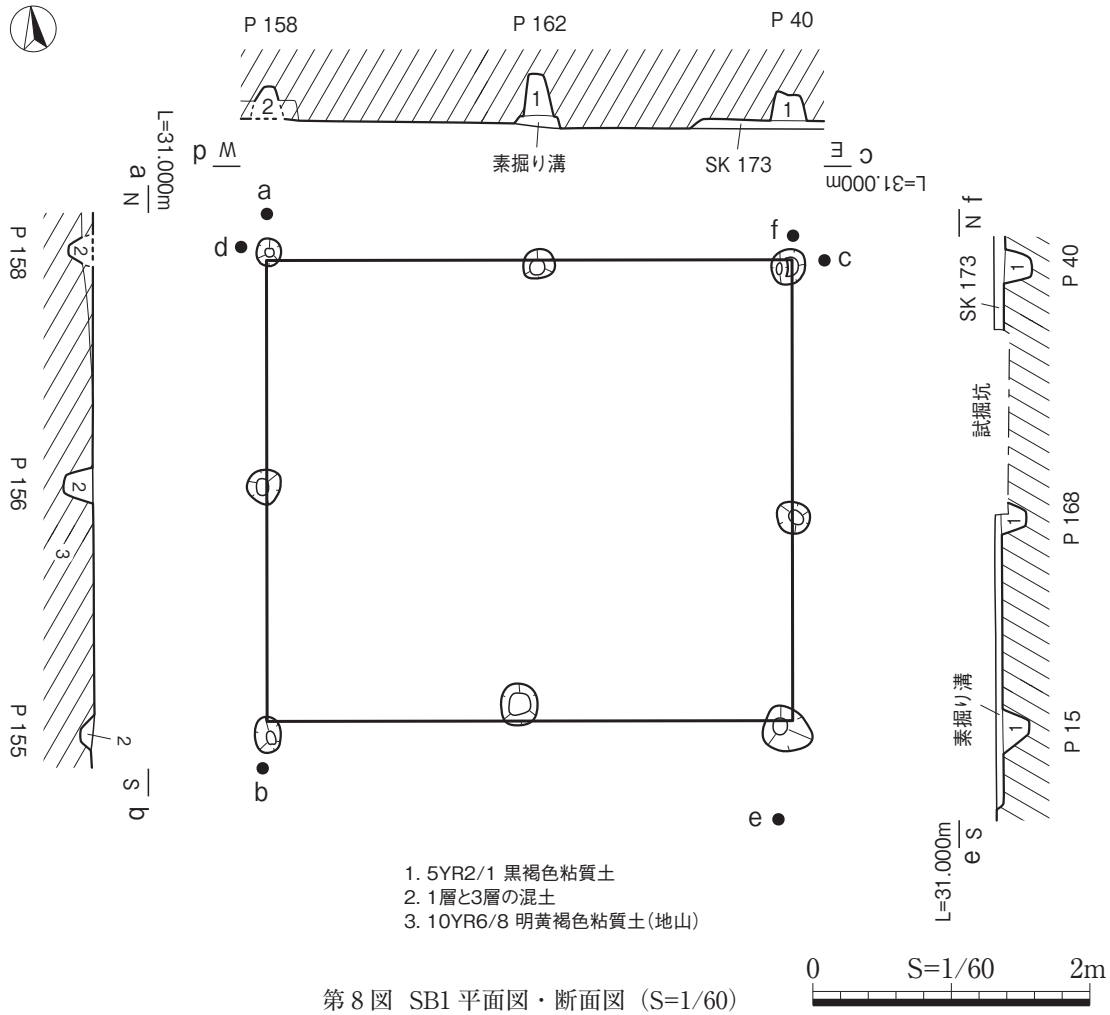


1. 7.5YR3/ 黒褐色シルト質粘土
2. 2.5Y5/4 黄褐色粘質土（Fe沈着）（地山）

第 6 図　SK132 土層断面図



第 7 図　N 調査区平面図（S=1/120）



第 8 図　SB1 平面図・断面図（S=1/60）

SI 1（遺構：第 9 図　遺物：第 9 図―1 ～ 6）

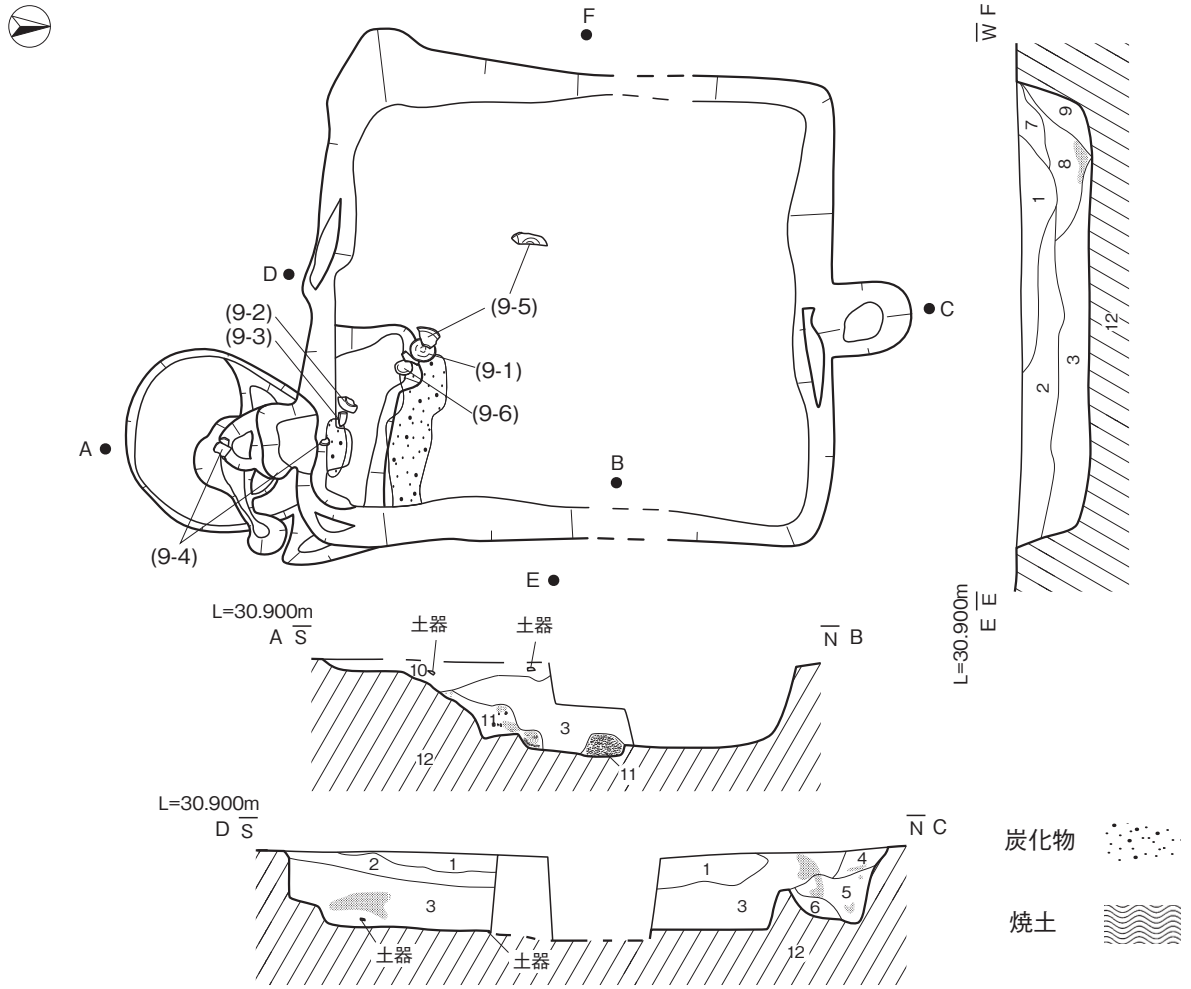
N 調査区の南東で検出した小型竪穴住居である。竪穴の形状は南北に主軸をもつ隅丸長方形で、主軸は座標北を向いている。建物規模は南北 2.8m、東西 2.5m、竪穴の深さは 40㎝、床面積は約 5.3㎡、床面は平坦で、その標高は T.P.30.3m である。柱穴は竪穴内外どちらからも明確なものは確認できなかった。竪穴の深さを考えると、床面の柱穴が削平されたとは考えにくいことから、柱穴は竪穴外に配置され、それはまたごく浅い掘り方であって、今調査では確認できなかった可能性が考えられる。床面に貼床や硬化面などは確認できなかった。

住居の南東コーナーでは、造り付けカマドを確認した。カマドは、住居奥壁面の一部を削り込んだものであり、焚口の痕跡、天井の一部、煙道を確認した。焚口は、焼結や被熱床は確認できなかったものの、それら推測範囲では南北 40㎝、東西 90㎝、深さ 10㎝弱の不整形な方形掘方を確認した。カマド天井は、被熱していない壁際の一部のみが、ややアーチ状を呈して残存していた。煙道は、被熱痕跡や天井部は全て失われ、地山掘り込み部分のみが残存していた。煙道の延伸方向は建物主軸と同方向ではなく、東へ 90° 振った方向に伸びており、またその先端には直径 20㎝程度の煙突痕跡があることを確認した。

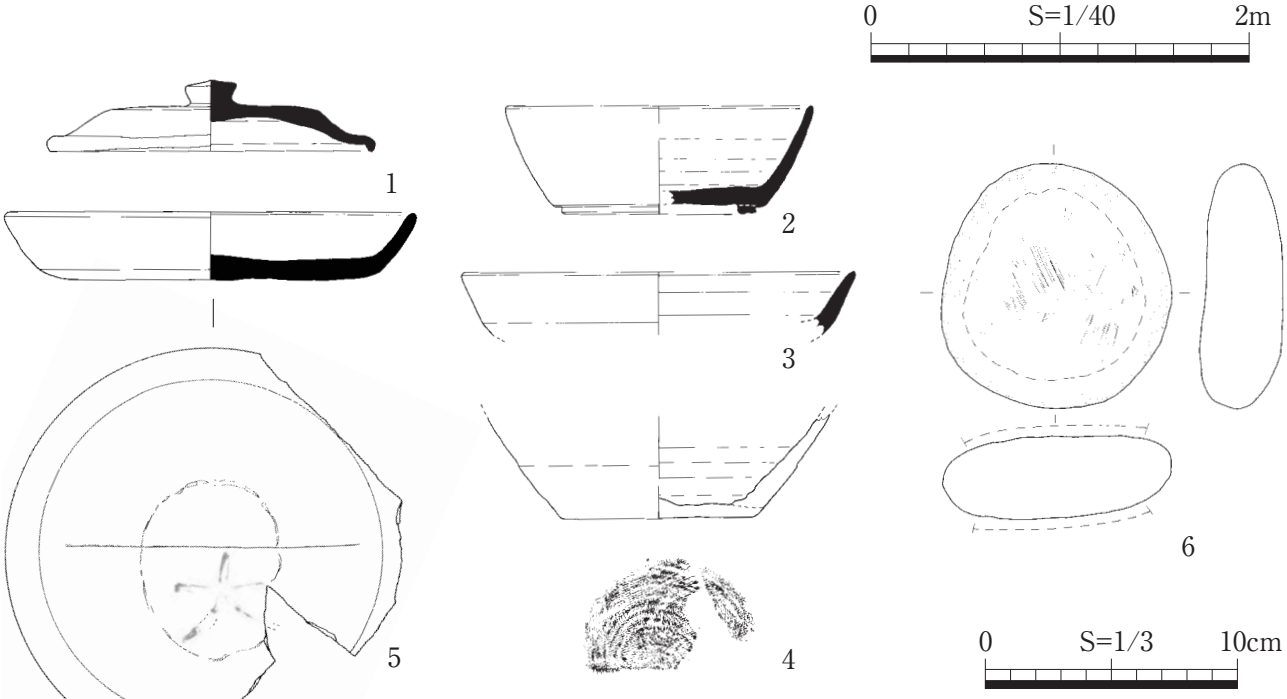
カマドは、廃棄の際に徹底して破壊され、ほとんどの破砕物は他所へ運ばれたと推測できる。わずかに残った焼粘土塊・焼土塊・炭化物といった破砕物の残滓は、破壊した後の煙道から焚口にかけて延べ敷かれ、最終的にはそれら残滓を含んだ埋土の上に土器を伏せおいてカマドの廃棄祭祀が行われたと考えられる。

住居の北壁中央では、径 40㎝、深さ 35㎝の土坑を確認した。断面の状況から、土坑が住居と一括して埋められていることがわかる。カマドの設置位置を考え合わせると、この土坑周辺が住居の入口であったと推測できる。

遺物は、出土量は少ないものの完形もしくは意図的に打ち欠かれたもので、すべて 9 世紀初頭のものである（第 9 図―1 ～ 6）。須恵器坏蓋及び盤（第 9 図―1・3）は床面直上から、有台坏（第 9 図―2）は住居埋土中から出土した。平底の土師器小甕（第 9 図―4）は外面に炭化物が付着し、また煙道埋土直上から出土していることから、住居廃絶時に破砕した日常使用の煮炊具の破片である。須恵器盤（第 9 図―5）は底部の裏に箆書き横一本線の浅い線刻が施され、その線刻の下に「大」と墨書されている。



1. 10YR2/2 黒褐色粘質土に地山ブロック土（10YR6/6 明黄褐色シルト質粘土）混じる
2. 7.5YR7/1 黒色粘質土
3. 10YR3/2 黒褐色粘質土に10YR6/6 明黄褐色シルト質粘土含む
4. 10YR2/3 黒褐色粘土にφ10㎜の地山ブロック少し混じる
5. 10YR2/1 黒色粘土にφ10㎜の地山ブロック少し混じる
6. 7.5YR4/1 褐灰色シルト質粘土
7. 10YR3/3 暗褐色粘質土
8. 10YR3/3 暗褐色粘質土にφ10㎜の地山ブロック含む
9. 10YR3/2 黒褐色粘質土にφ10㎜の地山ブロック含む
10. 7.5YR2/2 黒褐シルト質粘土
11. 7.5Y2/2 黒褐シルト質粘土に多量の焼土と炭化物含む
12. 10YR6/6 明黄褐色シルト質粘土（地山）



第 9 図　SI1 平面図・断面図（S=1/40）、遺物実測図（S=1/3）

第 2 節 S 調査区

SR1

S 調査区から N 調査区にかけての東側で検出した自然流路である。調査区壁面の崩落の危険性から、掘削は上層および一部の断ち割りのみに止めた。今調査では自然流路西肩の一部を検出したのみである。遺物は少ないものの、最上層堆積層から近世陶磁器が出土した他はすべて 9 ～ 10 世紀の土器であった。

SD1・2（遺物：図 13―12 ～ 15）

S 調査区の南西方向から北東方向に流れる不定形な流路で、深さは 10㎝程度である。検出は地山直上であるが、第 4 層を切ることから、遺構面よりも時期が下る。遺物は多量に出土しているが、すべて 9 ～ 10 世紀のもので、磨滅せず、また破片も大きいことから、調査区南側には当遺跡と同時期の遺跡が広がることが推測できる。

SD3（遺構：第 11 図　遺物：第 11 図―10）

S 調査区では、調査区南西方向から北へ向かって延びる状況を検出し、N 調査区では、調査区南東隅で SR1 に削られた状態を検出した溝である。幅は約 70㎝、深さ約 40㎝で、掘方は U 字状である。遺物は、9 世紀前半の須恵器盤の破片 1 点が出土したほかは土師器片が数点出土したのみであった。

SD4（遺物：第 13 図―16・17）

S 調査区の東側で検出した溝である。溝の南端は SR1 に切られている。幅は約 60㎝、深さ約 20㎝、遺物は、SD3 と比べると多く出土した。すべて 9 ～ 10 世紀のもので、内黒土器片が多く含まれる。須恵器瓶底（第 13 図―17）の外面・底部面・断面には漆のような赤茶色の塗膜の付着が認められる。

P7（遺構：第 11 図　遺物：第 11 図―8）

S 調査区の西端で検出した南北 15㎝、東西 20㎝、深さ 25㎝のピットである。遺物は、須恵器有台坏 1 点である。有台坏は 9 世紀初頭のもので、意図的に半裁し、ピット内に伏せ置いた可能性が示唆される。

SK190（遺構：第 11 図　遺物：第 11 図―9）

S 調査区の北東端で検出した直径 20㎝、深さ 53㎝の土坑である。遺物は、須恵器有台坏 1 点が伏せ置かれた状態で出土したほか、土師器片が出土した。有台坏は 9 世紀初頭のもので、意図的に口縁部の一部が打ち欠かれていた。

SK244（遺構：第 11 図　遺物：第 11 図―7）

S 調査区の南東端で検出した南北約 20㎝、東西 62㎝、深さ約 45㎝の不整形土坑である。遺物は、須恵器小型短頸壺 1 点が土坑埋土の上層に据え置かれた状態で出土したほか、土師器片が出土した。小型短頸壺は 9 世紀初頭のもので、意図的に口唇部の一部が打ち欠かれていた。

SK284（遺構：第 11 図　遺物：第 11 図―11）

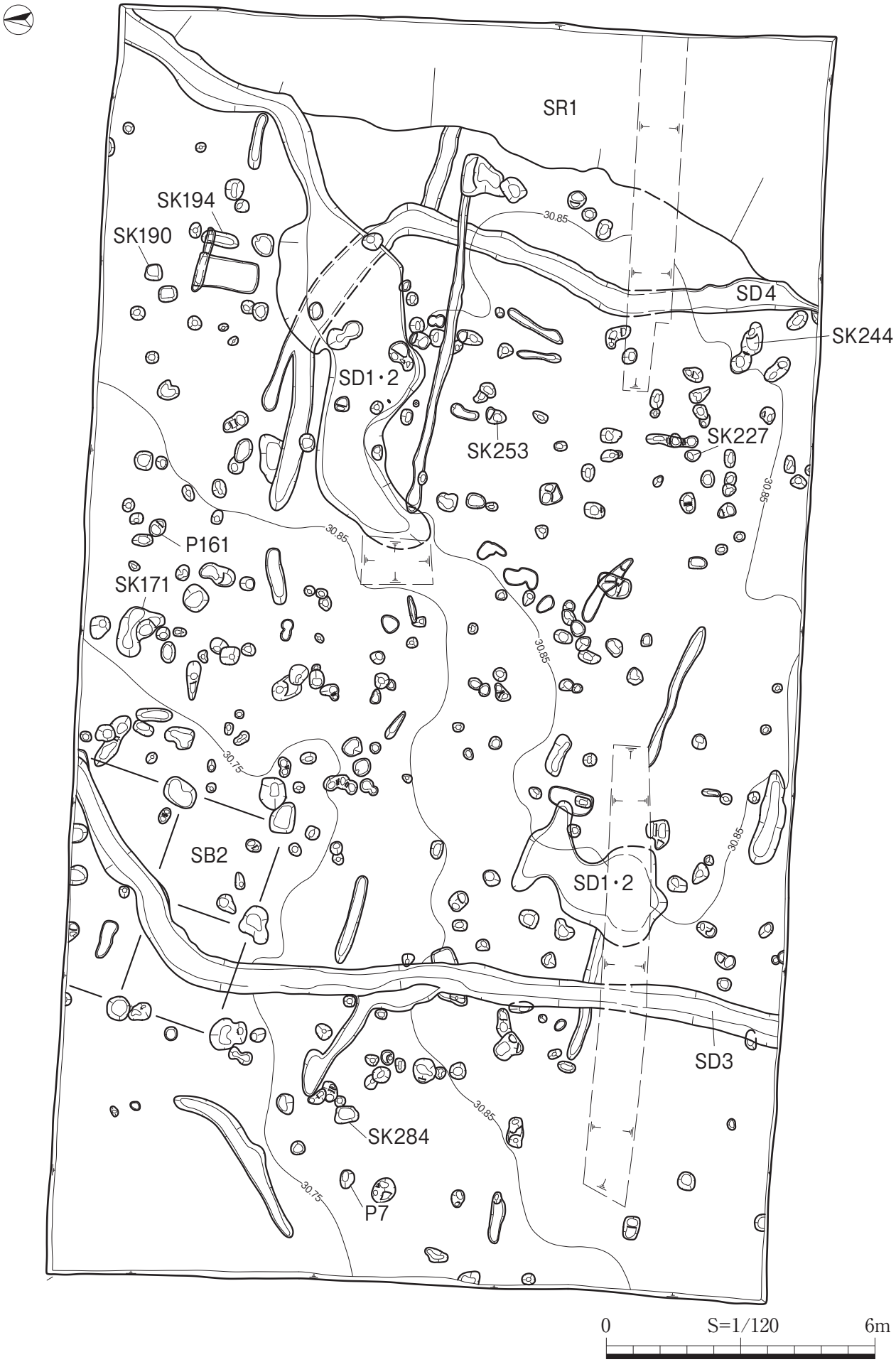
S 調査区の西端で検出した土師器甕を横たえた土器埋置土坑である。掘方は甕の大きさに沿わせたもので、上層包含層掘削中からすでに横たわった甕の胴部が確認できていたことから、埋置当初より甕の胴部が露天にさらされた状態であったことが推測できる。甕は 8 世紀末～ 9 世紀初頭のもので、肩部には箆書きによる×印の線刻がある。

SB2（遺構：第 12 図）

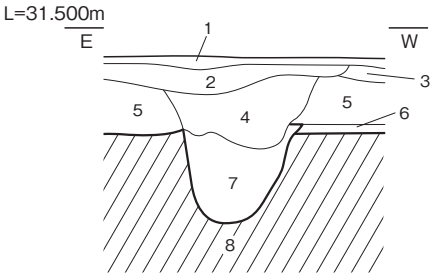
S 調査区の北壁西側で検出した総柱の掘立柱建物である。南北 2 間以上、東西 2 間であり、南北方向を主軸とすると、N14°―E とやや東に振る。建物規模は、南北柱間が 2.4 ～ 2.5m、東西柱間が 2.5 ～ 2.7m、面積は 26㎡以上になる。柱の掘方は円形と隅丸方形の 2 種類であるが、柱の抜き取りにより掘方が崩れ、旧の形状が不明なものもある。円形掘方は、直径は約 30㎝、深さは 30 ～ 40㎝、方形掘方は、長辺約 40㎝・短辺約 20㎝で、深さは約 40㎝である。遺物は土器の細片が出土するのみで時期を判断できるものはないが、9 世紀前半の遺物が出土した SD3 に切られていることから、その時期を下らない時期のものであるといえる。

第 3 節　遺物

以下には、上には記さなかったものの、遺構埋土から出土した遺物について述べる。第 13 図―20 は S 区 SK227 から出土した須恵器有台盤である。時期は 9 世紀前半を下らない。第 13 図―21・33 は S 区 SK194 から出土した須恵器坏蓋と石鍬である。須恵器坏蓋は 9 世紀前半のものである。第 13 図―22 は S 区 SK253、第 13 図―23・24 は S 区 P161 から出土した内黒土器である。外面に赤彩は施されないものの、しっかりとした高台をもち、堅緻な焼成でミガキも明瞭であり、10 世紀前半のものである。第 13 図―25・35 は S 区 SK171 から出土した平底の土師器小甕と砥石である。小甕の底部には糸切痕が残る。時期は判じにくいが、共伴する土器片から 9 世紀は下らない。なお、第 13 図―26 ～ 32・34・36 は遺物包含層から出土した遺物である。詳細は遺物観察表（第 2・3 表）を参照されたい。

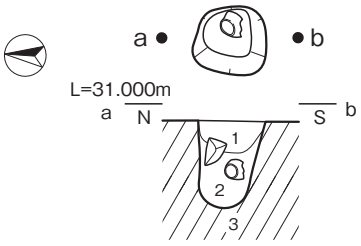


第 10 図　S 調査区平面図(S=1/120)



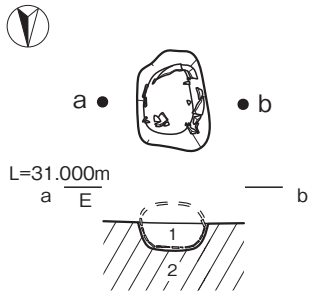
1. 5Y4/2 灰オリーブ色粘質土(旧耕土)
2. 7.5Y6/1 灰色粘質土(Fe沈着)
3. 5Y2/2オリーブ 黒色に1層が混じる
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土(Fe沈着)
5. 5Y2/1 黒色粘質土
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色に
   5Y2/2 オリーブ黒色シルト質粘土が混じる
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
8. 10YR6/6 明黄褐色粘質土

SD 3



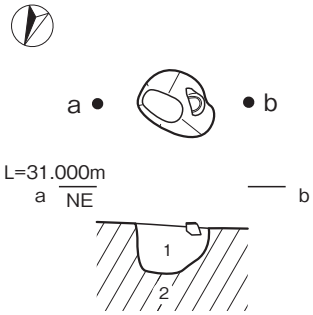
1. 7.5YR2/1 黒色粘質土
2. 7.5YR2/1 黒色シルト粘質土
   (φ10～30㎜の地山ブロック塊混じる)
3. 10YR7/6 明黄褐色粘質土

SK 190



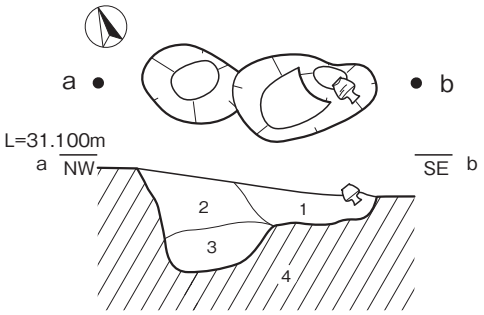
1. 7.5YR2/1 黒色粘質土
2. 10YR6/6 明黄褐色(Fe沈着)粘質土(地山)

SK 284



1. 7.5YR3/1 黒褐色粘質土
2. 10YR6/6 明黄褐色(Fe沈着)粘質土(地山)

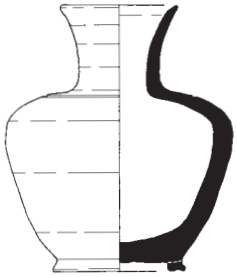
P 7



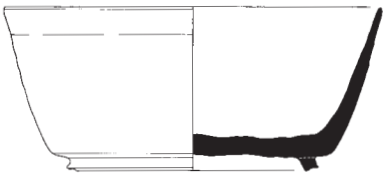
1. 7.5YR3/1 黒褐色粘質土
   (φ5cmの地山ブロック塊混じる)
2. 7.5YR3/1 黒褐色粘質
   (φ15～20㎝の地山ブロック塊混じる)
3. 7.5YR2/1 黒色粘質土
4. 10YR6/6 明黄褐色粘質土(地山)

SK 244

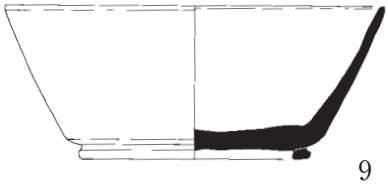
0 S=1/40 2m



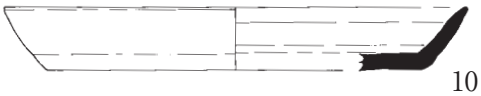
7



8



9

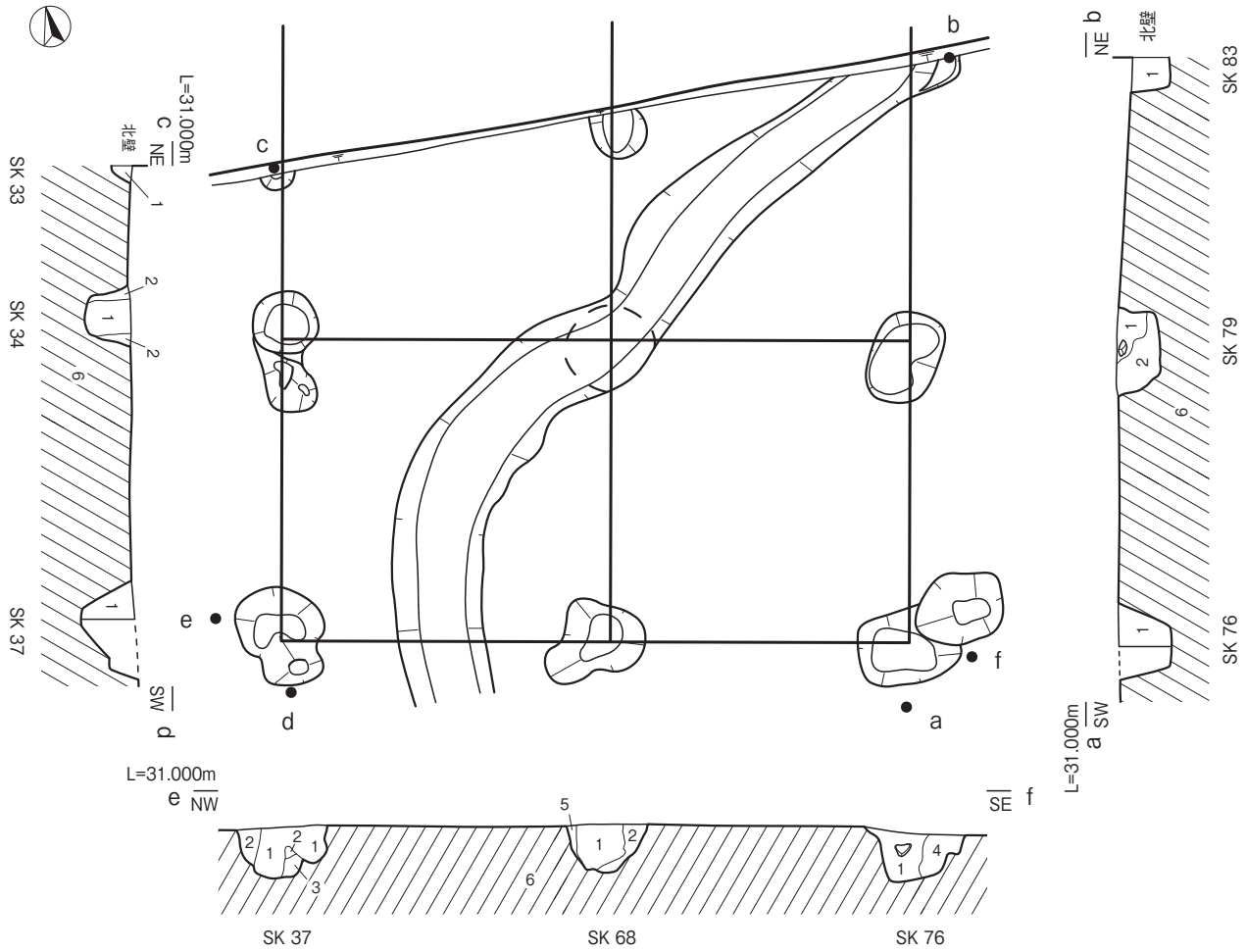


10

11

0 S=1/3 10cm

第 11 図 S 調査区遺構平面図・断面図(S=1/40)、遺物実測図(S=1/3)



1. 7.5YR2/1 黒色粘質土(シルト混じる)
2. 7.5YR3/2 黒褐色粘質土に地山ブロック塊混じる
3. 7.5YR2/1 黒色粘質土
4. 1層に多量の地山ブロック塊混じる
5. 1層と10YR6/6 明黄褐色(Fe沈着)粘質土の混土
6. 10YR6/6 明黄褐色(Fe沈着)粘質土(地山)

0　S=1/60　2m

第 12 図　SB2 平面図・断面図(S=1/60)

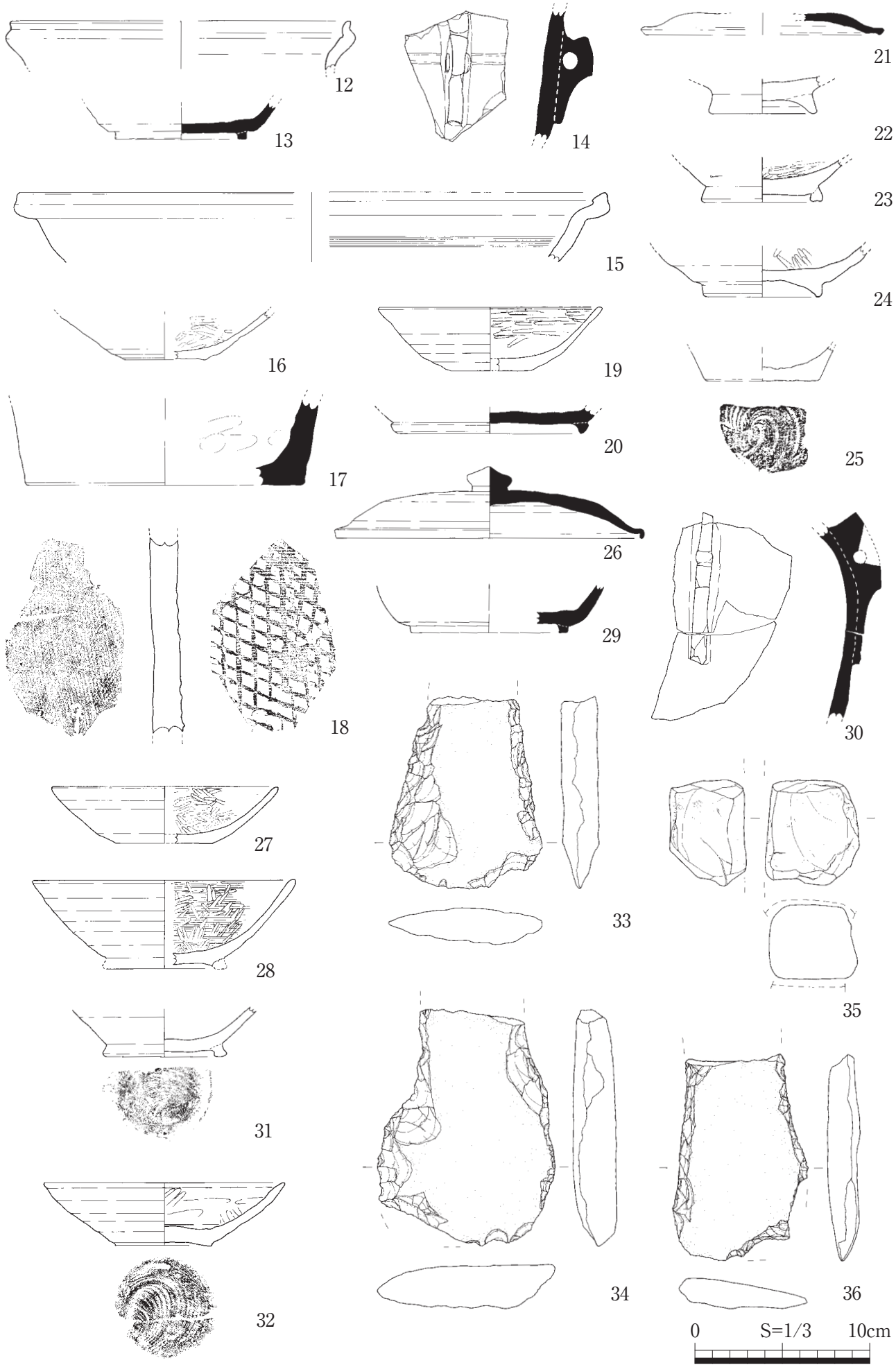
第 5 章 総括

今回の調査では、遺跡の空白地であった下林地区に古代の集落跡が存在することがわかった。これは、時期や遺構の分布状況など、当遺跡の南東側にある粟田遺跡、南西側にある清金アガトウ遺跡と類似した様相を示している。加えて、今調査の一環として行った調査対象西隣地の試掘調査においても自然流路を検出した（第 1 図)。このことは、下林バンジョウアケ遺跡が 2 つの自然流路に挟まれた幅 50m ほどの微高地上に営まれた集落であることを示している。おそらく、古代における手取川扇状地扇央部一帯の集落は、当遺跡と同じような旧河川や手取川支流の間の微高地上に、大小さまざまな規模で営まれていたと推測される。

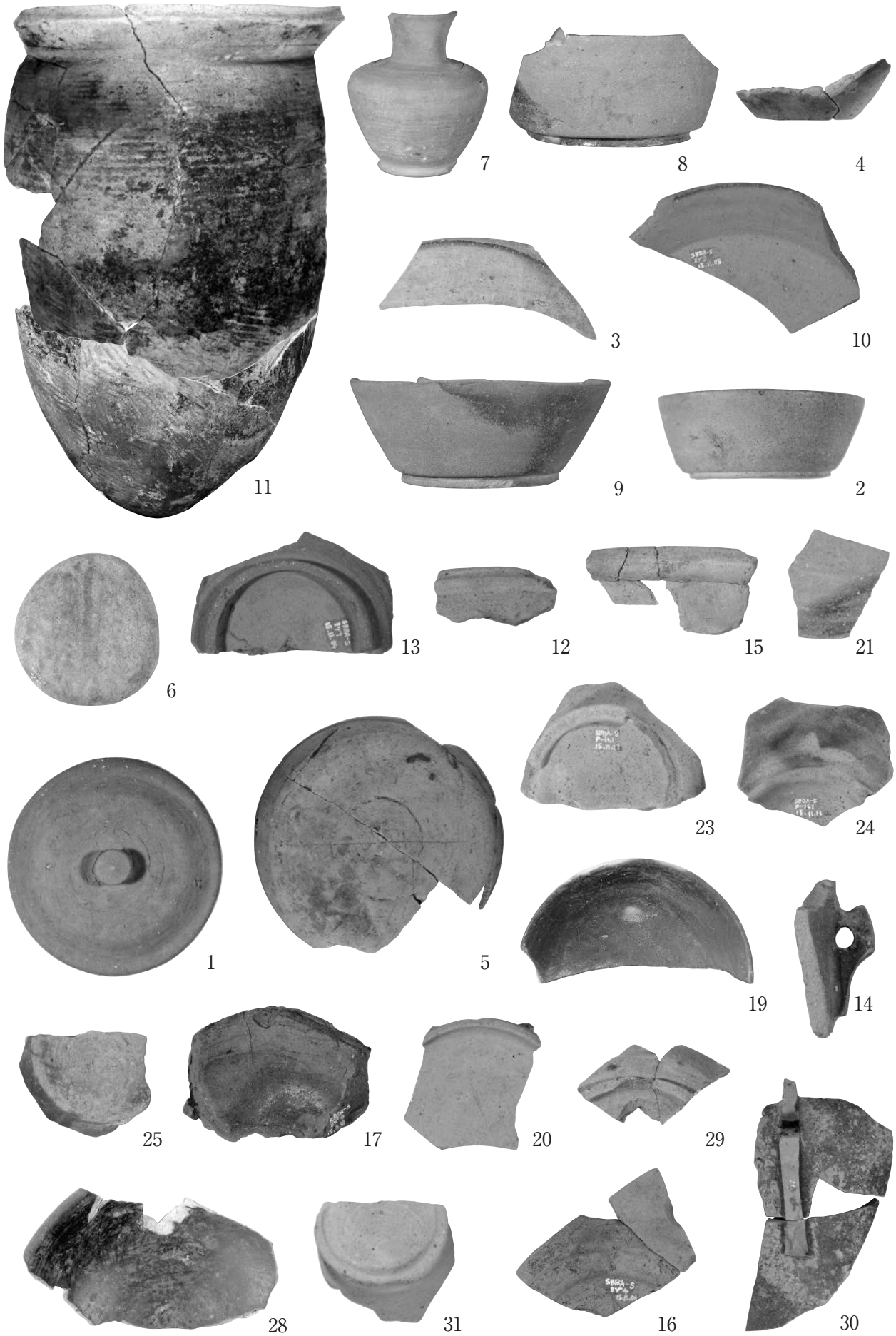
当遺跡は、粟田遺跡・清金アガトウ遺跡より調査面積が狭く、建物跡は 9 世紀代の掘立柱建物 2 棟と小型竪穴住居 1 棟のみであるが、土器供献遺構が数多く確認されていることは両遺跡にはない特徴である。また小型竪穴住居の入口と考えられるその北側には、直径 10 ～ 20㎝、深さ 15 ～ 20㎝の土坑数基を確認した。これらは不整列であり、建物柱穴とは考えにくいものの、簡易的な屋根の支柱である可能性が示唆できる。

集落に関する遺構はすべて 9 世紀のものであり、10 世紀に下るものはない。また、N 調査区では土坑やピットを切る素掘溝を多数確認している。このことから、当遺跡の集落としての営みは短期間で、その後は耕作等の生産域として利用されたと考えられる。しかし、素掘溝から出土する遺物が古代の土器のみであること、素堀溝が第 4 層に覆われることなどから、耕作地としても長くは存続せず、比較的早い段階で埋没したと考えられる。

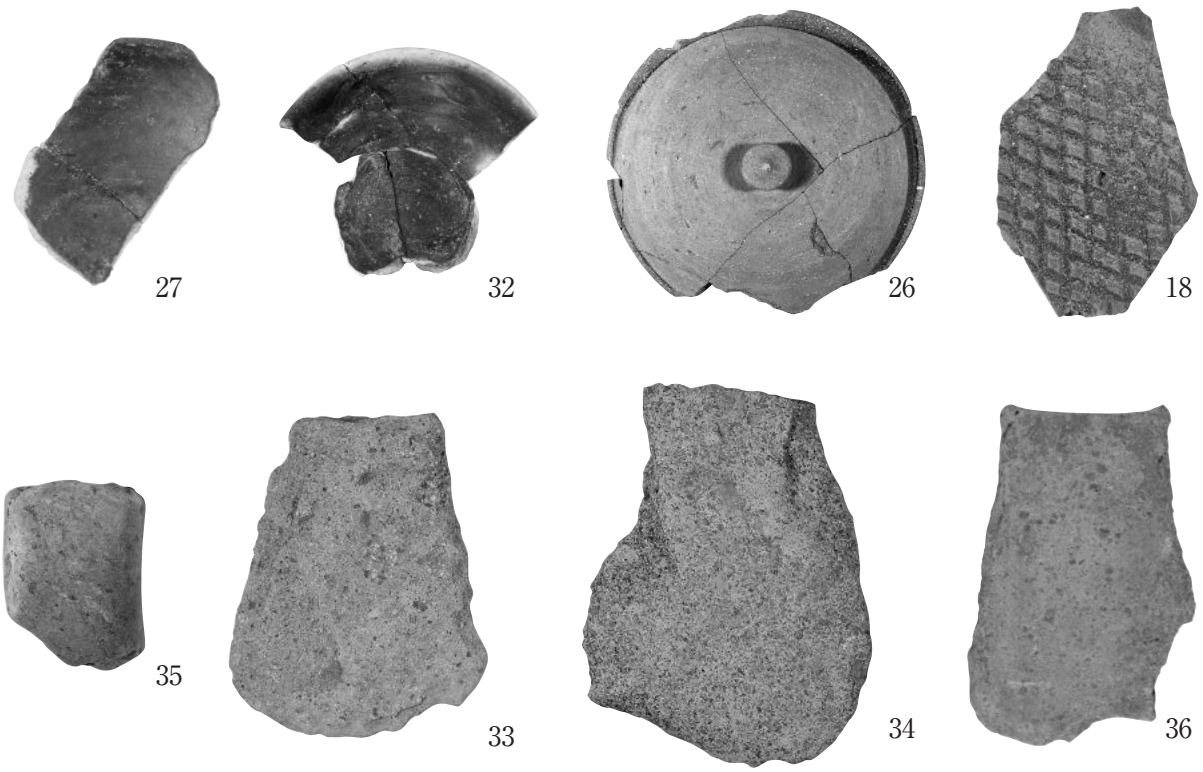
〈参考文献〉　田嶋明人　1988「古代土器編年軸の設定」『北陸古代土器研究の現状と課題（報告編)』北陸古代土器研究会
㈳石川県埋蔵文化財保存協会　1991『粟田遺跡発掘調査報告書』
野々市町教育委員会　1992『粟田遺跡第二次発掘調査報告書』
辰口町教育委員会　2005『和気後山谷窯跡群』
㈶石川県埋蔵文化財センター　2006『野々市町清金アガトウ遺跡』
小松市教育委員会　2006『額見町遺跡Ⅰ』



第 13 図　遺構出土遺物(12 ～ 25・33・35)・包含層出土遺物(26 ～ 32・34・36)実測図(S=1/3)

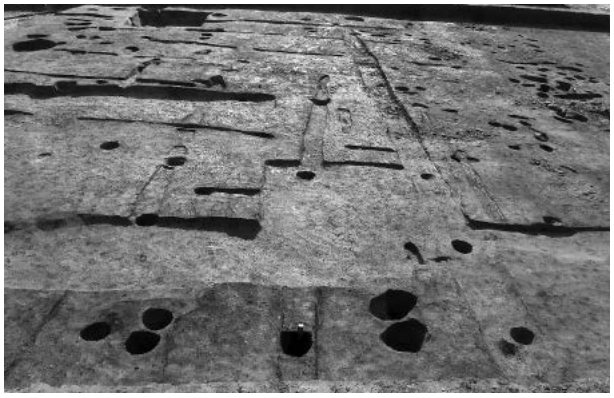


図版 1　出土遺物



図版 2　出土遺物

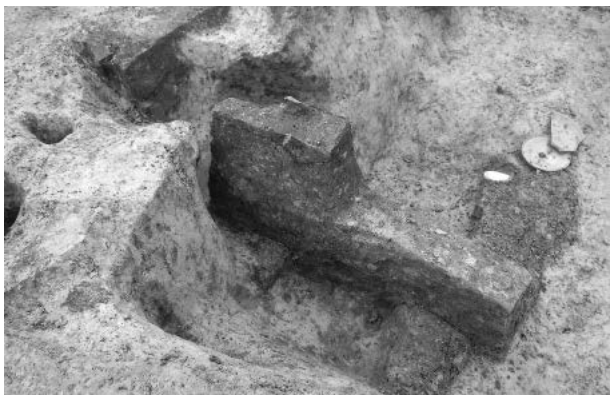
図版 3　調査区全景写真（左：N 調査区、右：S 調査区）



SB 1 全景写真（北から）

SB 2 全景写真（西から）

SI 1 全景写真（北東から）



SI 1 カマド検出状況（東から）

図版 4　遺構写真

第 2 表　土器観察表

番号	区名 遺構	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	調整(外) 調整(内)	色調(外) 色調(内)	残存率	備考	実測番号
1	N 区 SI 1	須恵器 坏蓋	130	28	85	ロクロナデ ロクロナデ、ケズリ	N6/0 灰色 N6/0 灰色	完形	つまみ径 20mm 回転ヘラ切り	N 11
2	N 区 SI 1	須恵器 有台坏	122	43	80	ロクロナデ ロクロナデ	5Y6/1 灰色 5Y6/1 灰色	口縁部 7/18 底部 7/18	部分的に自然釉 回転ヘラ切り、削り出し高台	T 20
3	N 区 SI 1	須恵器 坏	156	体部径 130		ロクロナデ ロクロナデ	2.5Y7/1 灰白色 2.5Y7/1 灰白色	口縁部 1/12 体部径 2/9	重ね焼痕	T 23
4	N 区 SI 1	土師器 小甕			74	ロクロナデ ロクロナデ	7.5YR5/3 にぶい褐色 10YR8/3 浅黄橙色	底部 5/9	部分的に煤 回転糸切り痕	T 19
5	N 区 SI 1	須恵器 盤	164	27	136	ロクロナデ ロクロナデ	2.5Y7/1 灰白色 2.5Y7/1 灰白色	口縁部 5/9 底部 8/9	墨書「大」 回転ヘラ切り、重ね焼痕	T 9
7	S 区 SK 244	須恵器 小型壺	48	106	52	ロクロナデ ロクロナデ	N5/0、6/0 灰色 N5/0、6/0 灰色	口頚部 5/12 体部 全周	脚部 5/18 工具痕残る	N 12
8	S 区 P 7	須恵器 有台坏	150	64	100	ロクロナデ ロクロナデ	5Y7/1 灰白色 7.5Y8/1 灰白色	口縁部 1/6 底部 5/9	自然釉(N4/ 灰色) 回転ヘラ切り	T 10
9	S 区 SK 190	須恵器 有台坏	151	61	92	ロクロナデ ロクロナデ、ナデ	10Y5/1、6/1 灰色 10Y5/1、6/1 灰色	口縁～体部 11/18 底部 全周	一部に自然釉(N4/0 灰色) 回転ヘラ切り、貼り付け高台	N 8
10	S 区 SD 3	須恵器 盤	184	25	150	ロクロナデ ロクロナデ	5Y7/1 灰白色 5Y7/1 灰白色	口縁部 1/9 底部 1/6	回転ヘラ切り 重ね焼痕	N 14
11	S 区 SK 284	土師器 甕	230	336	60	ヨコナデ、カキ目、タタキ ヨコナデ、カキ目、タタキ	10YR6/3 にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色	口縁部 2/3 体部 2/3	外面に煤 格子目タタキ	N 1
12	S 区 SD 1	土師器 甕	(194)			ヨコナデ ヨコナデ	10YR8/2 灰白色 10YR7/3 にぶい黄橙色	口縁部 1/12		T 35
13	S 区 SD 1	須恵器 有台坏			74	ロクロナデ ロクロナデ	5Y7/1 灰白色 5Y7/1 灰白色	底部 1/2	回転ヘラ切り	T 34
14	S 区 SD 1	須恵器 双耳瓶					N5/ 灰色 2.5Y7/1 灰白色	小片	自然釉	T 36
15	S 区 SD 2	土師器 堝	(350)			ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、かき目	7.5YR7/6 橙色 7.5YR6/4 にぶい橙色	口縁部 1/12		T 24
16	S 区 SD 4	土師器 内黒埦			48	ナデ ミガキ、ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙色 10YR3/1 黒褐色	底部 1/3	内黒	T 28
17	S 区 SD 4	須恵器 瓶			160	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色 10YR6/1 褐灰色	底部 1/6	外面・断面に付着物(漆か?) 指圧痕1ヶ所	T 27
18	N 区 SK 173	平瓦	最大長 (112)	最大幅 (66)	最大厚 (17)	格子目 布目	5Y4/1 灰色 5Y6/1 灰色	小片		N 33

番号	区名 遺構	器種	口径(㎜)	器高(㎜)	底径(㎜)	調整(外) 調整(内)	色調(外) 色調(内)	残存率	備考	実測番号
19	N 区 SK 132	土師器 内黒埦	128	36	42	ヨコナデ ナデ、ミガキ、ケズリ	10YR7/4 にぶい黄橙色 N3/ 暗灰色	口縁部 1/2 底部 1/2	内黒、外面赤彩痕 ヘラ切り	T 13
20	S 区 SK 227	須恵器 有台盤			112	ロクロナデ ロクロナデ	N7/0 灰白色 N7/0 灰白色	底部 1/6	回転ヘラ切り	N 18
21	S 区 SK 194	須恵器 坏蓋	(140)			ロクロナデ、ナデ ロクロナデ	5Y6/1 灰色 7.5Y5/1 灰色	蓋口径 1/18	外面一部降灰 回転ヘラ切り	T 37
22	S 区 SK 253	土師器 内黒埦			62	ロクロナデ ロクロナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色 10YR4/1 褐灰色	底部 2/3	回転ナデ、写真なし	N 17
23	S 区 P 161	土師器 内黒埦			70	ヨコナデ、ナデ ミガキ、ナデ、ケズリ	7.5YR7/6 橙色 7.5Y3/1 オリーブ黒色	底部 1/4	内黒 貼り付け高台	T 15
24	S 区 P 161	土師器 内黒埦		体部径 106	68	ナデ ミガキ、ナデ	10YR6/2 灰黄褐色 10YR6/2 灰黄褐色	底部 小片 体部 2/9	内黒(7.5Y3/1 オリーブ黒色) 貼り付け高台	T 16
25	S 区 SK 171	土師器 小甕			65	ナデ ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい橙色	底部 1/3	回転糸切り痕 回転ナデ	T 32
26	N 区 南壁包含層	須恵器 坏蓋	177	41	122	ロクロナデ ロクロナデ	7.5Y5/1 灰色 7.5Y5/1 灰色	口縁部 5/9 つまみ～底部 完形	つまみ径 26㎜ 重ね焼痕	N 7
27	N 区 全面精査	土師器 内黒埦	128	32	54	ロクロナデ、ケズリ ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙色 2.5Y3/1 黒褐色	底部 1/3 口縁部 1/18	内黒、回転ナデ、外面赤彩痕 体部 1/9	N 25
28	N 区 重機掘削	土師器 内黒埦	(150)	高台貼り付け痕 (66)		ロクロナデ ロクロナデ、ミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙色 7.5Y3/1 オリーブ黒色	1/9	内黒、回転ナデ 貼り付け高台痕跡	N 22
29	S 区 遺構検出	須恵器 有台坏			90	ロクロナデ ロクロナデ	5Y5/1、4/1 灰色 5Y5/1 灰色	高台部 1/6	重ね焼痕	N 30
30	S 区 壁面	須恵器 双耳瓶					7.5Y4/1 灰色 2.5Y6/1 黄灰色	小片	自然釉	N 29
31	S 区 遺構検出	土師器 有台埦			72	ロクロナデ、ナデ ロクロナデ、ナデ	2.5Y7/1 灰白色 5Y7/1 灰白色	底部 5/9	回転糸切り痕 回転ナデ	N 31
32	S 区 重機掘削	土師器 内黒埦	138	36	56	ロクロナデ ロクロナデ、ミガキ	2.5Y7/3、7/4 浅黄色 5Y3/1 オリーブ黒色	口縁～体部 1/3 底部 8/9	内黒 回転糸切り痕	N 21

第 3 表　石製品観察表

番号	区名	遺構	器種	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重量(g)	石材	備考	実測番号
6	N 区	SI 1	砥石	97	91	34	430	安山岩	完形･自然石転用	T 2
33	S 区	SK 194	石鍬	110.5	88	22	230	凝灰岩	上部欠損	T 5
34	N 区	遺構検出	石鍬	135	102	25	425	凝灰岩	上部、左下部欠損	T 4
35	S 区	SK 171	砥石	61	54	44	165	砂岩		T 3
36	S 区	遺構検出	石鍬	118.5	77.5	19	175	凝灰岩	上部、側面欠損	T 6

報　告　書　抄　録

ふりがな	しもばやしばんじょうあけ
書名	下林バンジョウアケ遺跡
副書名	野々市農業協同組合ライスセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	西村　慈子
編集機関	野々市市教育委員会
所在地	〒921－8510　石川県野々市市三納一丁目 1 番地　　Tel：076－227－6122
発行機関	野々市市教育委員会
発行年月日	西暦　2016 年 3 月 29 日

所収遺跡名(フリガナ)	所在地(フリガナ)	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
下林(シモバヤシ) バンジョウアケ 遺跡(イセキ)	石川県(イシカワケン) 野々市市(ノノイチシ) 下林(シモバヤシ)	17344		36° 31′ 02″	136° 35′ 58″	2015.10.23 ～ 2015.12.3	952	記録 保存 調査
	種　別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	集落	古代		竪穴住居1、掘立柱建物2、土器供献土坑5、溝4 ほか		土器、石製品		

要　約	開発行為に伴って新規発見された古代の集落遺跡である。調査区の東･西には自然流路を確認しており、集落域は限定される。遺構は全て9世紀のうちに収まる。遺構は9世紀初頭の土器埋置土坑と小型竪穴住居1棟、それに続く時期の掘立柱建物2棟や土器供献土坑、その他多数の土坑･ピットを検出した。

2016 年 3 月 29 日　発行

野々市農業協同組合ライスセンター建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

下林バンジョウアケ遺跡

著作権所有　石川県野々市市三納一丁目 1 番地
発　行　者　野々市市教育委員会
印　刷　者　石川県野々市市矢作三丁目 18
高桑美術印刷株式会社